

論文内容の要旨

氏名	峯 昌啓
Basic biology education in high school and acceptance of genetically modified food in Japan (和訳) 日本における高校生物基礎教育と遺伝子組み換え食品の受容	

論文内容の要旨

遺伝子組み換え食品(GM 食品)の開発、流通が世界的に急速に進んでいる。一方でそれらに対する一般市民の受容は世界的にみても低く、日本においては、米国や欧州の国々と比較しGM食品への受容は低いことが、これまでの調査で明らかにされてきた。遺伝子組み換えの受容が低いことにより、一般市民と専門家、政治との間に軋轢が生じているため、様々な教育的な試みがなされてきたが、その効果については一定の見解を得られていない。

そこで本研究では、日本における高校生物教育が GM 食品の受容に影響を与えるかを検証した。日本における高校進学率は 98%と高く、高校での生物は選択することができ、教育課程により内容が約 10 年に一回改定される。高校生物の選択による学習のレベルの違いは主に、生物を選択しない群から、生物1などの基礎的なレベルを履修した群、生物2などの応用レベルを履修した群で、3 段階に分類した。また 20 代、30 代、40 代と年代により教育課程が変わり、教育課程により遺伝子組み換え技術や人体の食物の消化についての教育内容に差があることを調査した。その後、研究参加者の高校生物の学習レベルと履修過程の違いによって、持っている GM 食品を理解するための基礎知識と GM 食品の受容の差異について分析をした。

オンラインアンケートを 1594 人に送付し、1122 人(70.4%)から回答を得た。全体として、GM 野菜、GM 魚、GM 肉への受容は、それぞれ 33.6%、29.0%、29.1%だった。生物の基礎知識を測るテストでは、生物の学習レベルでは有意差を認めたが、学習過程の違いに相当する 20 代、30 代、40 代の間で有意差は認めなかった。一方で、GM 食品の受容については、生物の学習レベルの違いでは有意差を認めず、学習過程の違う年代の違いでは、20 代と比較し、30 代、40 代は有意に受容が低かった。年代の違いによる GM 食品への受容へ影響に関しては、これまでの心理・社会学の知見から、高校生物の学習過程が違うだけでなく、GM 食品が登場した時の年齢や、結婚や子供の有無など経験の差異も大きな影響を与えることが考えられた。

以上、本研究からは教育レベルが違うことにより知識に差が出るものの、教育だけは GM 食品の受容に有意な影響を与えないことが示唆された。日本において、高校での基礎教育が GM 食品の受容に与える影響を検証した初めての大規模な研究である。